

早期発見へ自己検診を

十月は「乳がん月間」。乳がんは早期に発見、治療すれば、高い確率で治る病気といわれる。異常にいち早く気付くには、入浴時や就寝前に自分で胸を触って調べる自己検診を習慣付けたい。最近では自己検診の参考になる触診モデル(模型)も普及してきた。

アメリカンファミリー生命保険の代理店にある乳がんの触診モデル。保険の相談などで立ち寄った女性らが触れていくという
(東京都新宿区)



今月は「乳がん月間」

触診モデル参考に確認

「自己検診で異常を感じても、どんな状態が乳がんなのか分からない」。北九州総合病院(北九州市)の西亀正之院長は約三十年前、乳がんの集団検診の受診者から、そんな声を聞いた。

そこで、医療機器メーカーの高研(東京)と一緒に、触診モデルを開発した。

シリコン製のモデルは人体に近い触感で、がんによるしこりや皮膚の陥没などを精巧に再現。ベルトで首から掛けて、自分の乳房と同じ位置で触れることもできる。

西亀院長は「がんはしこりとして感じられるようになると、進行が速い。病院などでの検診

しこりの硬さまで再現した乳がんの触診モデル。高研鶴岡東工場の宇野広さんは「早期発見に役立ててもらえればというのが、変わらない願いですね」(山形県鶴岡市)



などの症状も触って確かめられる。

「乳がんになる人が増え続けているので、身近な場所に置くことにした。気軽に足を止めて、少しでも乳がんに関心をもってもらえれば」とアフラックの担当者。

自治体やがん関連団体の中には、触診モデルを貸し出しているところもあり、地域や職場などで学ぶ機会をつくるのもよいだろう。

を「点」とすれば、自己検診による「線」のチェックが大切。欧米では、二十歳を過ぎた女性には当たり前のように自己検診をしています」と強調する。

日本対がん協会(東京)によると、乳がんには毎年約四万人が罹患、特に三十代以上がかかりやすい。昨年、乳がんが死亡した日本人女性は一万一千人を超えた。

自己検診で乳房の状態を日常的にチェックする。合わせて、全国のショッピングセンターや商店街、駅構内などにある約六百店の店頭で乳がんのモデルを設置した。乳がんのほか、乳腺症、早期発見のポイントだ。